**〇夏３番の発句**

我亭（ちん）を楽しむ
蕣（あさがほ）の二葉にうれしほとゝぎす　調柳

**〈作者について〉**

作者調柳は既出。春０６番を参照のこと。

**〈語注〉**

・「ほとゝぎす」によって、夏。なお、「蕣」は花の咲く秋の季語だが、この句では「蕣の二葉」を詠んでおり、初夏を表現している。

・ほとゝぎす　ホトトギス科の鳥。初夏に南方から来る渡り鳥で、古来、夏を告げる、その初音を待ちわびた。『連珠合璧集』「卯月トアラバ」に「郭公の初こゑ」とある。用例は、「けさきなきいまだたびなる郭公花たちばなにやどはからなむ　読人不知」（『古今和歌集』一四一）など多数。

・亭　眺望・休憩のために庭園などに設けた簡易な建物、四阿。転じて、休養・接客用の本建築をも言う。別荘。中世以降、唐音で「ちん」と発音する。『俳諧類船集』「亭（チン）」の付合語に「納涼（ダウレウ）・下屋敷・植込（ウヘコミ）」などがある。

・蕣　「あさがほ」と読む。「蕣」は、本来は「むくげ」（木槿・槿）の意だが、ここでは「蕣の二葉」とあり、一年草の「あさがお」（牽牛花）を詠んだものと解釈した。むくげ・あさがおは共に、一日で花がしぼむので、はかないものとされる。用例に、「題しらず／おきて見むとおもひしほどに枯れにけり露よりけなるあさがほの花　曾祢好忠（『新古今和歌集』三四三）など。

・うれし　物事が、当人の思い通りの状態になって、喜ばしい。この句の「うれし」は、秋の花を楽しに種を蒔いた朝顔が発芽したうれしさと、時鳥の初音を聞いたうれしさとの両方にかかる。用例に、「鷹一つ見付けてうれしいらご崎　芭蕉」（『笈の小文』『続の原』他）などがある。

**〈句解〉**

「自らの別荘での生活を楽しむ
秋の花を楽しみに種を蒔いた朝顔が芽を出し、その二葉を見付けて喜んでいた、丁度その時、待ちかねていた時鳥の初音を聞いた。何とうれしいことだろう。」

**○夏４番の発句**

鳴上(なきアゲ)て羽(はね)落したりほとゝぎす　　三翁

**〈作者について〉**

作者三翁は本名・生没年不詳。『続の原』（貞享五）には本句の他に秋の句一句が入集。その他、其角編の『続虚栗』（貞享四）、『いつを昔』（元禄三）、『花摘』（元禄三）、『雑談集』（元禄五）、および嵐雪編の『つちのえ辰のとし歳旦』（貞享五）、『其侶』（元禄三）、『或時集』（元禄七）や嵐雪著、百里・氷花編『杜撰集』（元禄十四年）などに入集。また、江水編『元禄百人一句』（元禄四）巻末の「誹諧作者目録」中「江戸」の部の最初にその名が見える。

**〈語注〉**

・「ほとゝぎす」によって、夏。

・鳴上て　声を高くあげて鳴く。鳴き立てる。底本の「鳴上(アケ)て」の振り仮名は「なきあがりて」と読ませない為であろうか。五月雨頃の時鳥は、飛びながら鳴く声を詠まれることが多い。用例に、「さみだれのはれまも見えぬ雲ぢより山ほととぎすなきてすぐなり　西行」（『山家集』）「ほとゝぎすなき〳〵飛ぞいそがはし　芭蕉」（『続虚栗』など）がある。

・羽落し　鳥類の羽は、仲夏から晩夏にかけて冬羽から夏羽へ抜け替わる。この時期の羽の調わない鳥を「羽ぬけ（の）鳥」と言い、『誹諧初学抄』（末夏）・『毛吹草』（中夏）・『増山井』（五月）など　で夏の季語とされる。この句のほととぎすは、羽替えが始まり「羽落し」たのであろう。

**〈句解〉**

「声高く鳴き続けながら飛び過ぎていった時鳥が、羽を落としていった。鳥の羽が抜け替わる、暑い夏ももうすぐだ。」

夏３番の句が、初夏の時鳥を詠んだのに対し、当句は仲夏の時鳥を詠んでいる。

**○夏５番の発句**

卯月とや籬（まがき）のけしの花ぐもり　沾蓬

**〈作者について〉**

作者沾蓬は既出。春０８番を参照のこと。

**〈語注〉**

・「卯月」によって、夏。

・卯月　旧暦四月の異称。『増山井』に「卯月といふも、卯の花月といふべきを略せるなり」とある。立夏から小満頃の時期が含まれる場合が多く、温暖な時候で比較的晴れが多い時期である。

・籬　竹や柴などで目を粗く編んだ垣。ませ。ませがき。『毛吹草』巻第一に「一地誹諧には垣と有に、梅・卯花・蕨（あさがほ）は連歌付、木槿（むくげ）・正木・小角豆（さゝげ）等ははいかい」とある。なお、垣に卯の花を　詠んだ歌では、卯の花は月光や波などと見紛う、とされることが多い。

・けしの花　ケシ科の二年草。初夏、茎の頂に四弁花を付ける。花の色は白・紅・紫など。「けしの花」を、『誹諧初学抄』（末春）は春の季語とするが、『はなひ草』（四月）・『毛吹草』（四月）・『増山井』（芥子の花 四月）は初夏の俳諧季語とする。用例に、「白芥子や時雨の花の咲つらん　芭蕉」（『鵲尾冠』）がある。

・花ぐもり　本来は、桜が咲く頃の曇天を言う。この句では、桜ならぬ、けしの花の咲く頃の曇天に取り成している。桜の季節以外の「花曇」の用例に、「どむみりとあふちや雨の花曇　芭蕉」（『芭蕉翁行状記』）がある。

**〈句解〉**

「卯月というのだろうか。曇り空の下、籬の卯の花が、足下に咲くけしの花に覆い被さる雲のように、咲き乱れている。」

**○夏６番の発句**

顔撫し菖蒲（なで　あやめ）あやしや夜の軒　　立些

**〈作者について〉**

作者立些は既出。春１６番を参照のこと。

**〈語注〉**

・「菖」によって、夏。

・菖　「あやめ」と読む。古名「あやめ」は、現代では「菖蒲（しょうぶ）」と称するサトイモ科の多年草で、水辺に群生する。葉は剣の形で香が強いので邪気を払うとされ、端午の節句に軒に葺き、又、粽を包むのに用いる。『増山井』五月に「あやめふくは四日也」とある。仲夏に黄緑色の小ぶりの花を付ける。なお、現代に「あやめ」や「花菖蒲」と称する植物は、初夏に紫や白の大輪の花を咲かせる、ともにアヤメ科の多年草で、この句の「菖」とは別物である。当句の「あやめ」は「文目」すなわち、物の区別、見分け、の意を掛けている。

・あやし　常識で判断しうることの範囲外にある対象に触れた時、生ずる感情をいう。対象への畏敬の念を表す場合、対象に対する不審の念を表す場合、また、対象を不都合なものとして否定的判断をする場合などを含む。当句の「あやめあやし」は「あやめも分かず」すなわち、暗くて物の　模様や区別がはっきりしないさまの意も掛けている。

**〈句解〉**

「暗くて物の区別がはっきりしない夜の軒端で、わたしの顔を撫でたものがある。何だろう、と訝しく思ったら、端午の節句のために軒に葺いた菖蒲だった。邪気を払ってくれたのだろうか。何やら不思議であることよ。」

この句の上五中七ではア音が多用されており、下五のオ音多用と相俟って、独特の効果を発揮している。

**〇夏７番の発句**

粽草（ちまき）さばく（濁点ママ）女の早苗かな　　調味

**〈作者について〉**

作者調味は既出。春５４番を参照のこと。

**〈語注〉**

・「粽」によって、夏。

・粽草　真菰の異称。日本各地の沼沢に自生する、イネ科の多年草。古来、此を刈り取って、様々な用途に用いてきた。粽は、餅や団子を茅・菰・笹などで巻き、藺などで縛って、煮たり蒸したりして食する。「粽結ふかた手にはさむ額髪　芭蕉」（『猿蓑』）

・さばく　物や材料などを、上手に扱いこなす。また、うまく手で解き分ける。この句では、「粽草」と「早苗」との両方にかかる。

・早苗　苗代で充分に育ち、田へ移植するのに適するまでになった稲の苗のこと。『毛吹草』（中夏）・『増山井』（五月）に載る「早苗取」は、田植えの前に、早苗を苗代田から取り、小束に纏めること。また、その早苗を田に植えることや、その人。この作業は、早苗を痛めたり、枯れさせたりしないように、田植の当日に手早く行う必要がある。その為、器用な女性が必要とされた。

**〈句解〉**

「端午の節句に備えて、女の人が、粽草を巻いて縛って粽を作り並べてゆく様は、まるで、田植の日の早朝、早苗を小束に纏めて並べてゆくようで、手際よく見事だ。」